



幼稚園および保育所において発達障害幼児が 参加できる集団遊びの開発

富山大学 人間発達科学部

准教授 西館 有沙

1. はじめに

わが国の幼児教育は、遊びを通じた指導を中心にすすめている。幼稚園教育には「幼児の自発的な学習としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習である」と記されている。

発達障害のある子どもは、集団での遊びに参加できないことがしばしばある(代田, 2008; 加藤・香野, 2012など)。これには、他児に関心が向きにくい、他のことに気が散りやすいなどの発達障害の特性が影響していると考えられる。

幼稚園や保育所において、発達障害児が集団遊びに参加するためには、子どものつまずきに応じた保育者の支援が必要である。ただし、幼稚園や保育所では、保育者一人が担当する子どもの数が多く、保育者が常に発達障害児についていることが必ずしもある場合が多い。そのため、幼稚園や保育所において、保育者が行うことのできる支援のあり方を検討していくなくてはならない。

そこで本研究では、幼稚園や保育所において、発達障害児がどのように集団遊びに参加しているか、発達障害児に集団遊びに参加できない原因とは何かを明らかにする。また、この結果をもとに、発達障害児が、集団遊びに無理なく参加し、遊びを楽しむための支援のあり方について検討を行う。なお、ここで言う「集団遊び」とは、幼稚園や保育所において、複数の子どもが一つの目的や場面設定、ルールなどを共有して展開される遊びを指し、保育者が計画をたて、クラスや年齢別の集団に向けて行う活動だけでなく、子どもたちが自由に遊ぶ中で生まれた集団での遊び(ごっこ遊びや共同制作など)を含む。

2. 保育者に対するヒアリング調査

(1) 方法

2014年5月から12月にかけて、T県、I県、O県の幼稚園および保育所に勤める保育者80名に、半構造化面接による調査を実施した。一人につき20分程度の面接を行った。

(2) 結果と考察

これまでに担当した発達障害やその傾向のある子ども

が集団遊びに参加できなかったことがあるかを尋ねたところ、74名が「ある」と答えた。この原因としては、興味の幅が狭い、新しい活動への不安が高い、遊びに集中できない、遊びの難易度が高い、ルールを守れない、感覚過敏がある、状況や子どもの状態に寄って参加が必ずしもある場合があるといったことが挙げられた。

興味の幅が狭い事例としては、たとえば「ブロック遊びを一人でやり続け、他の遊びに誘ってもあまり関心を示さない」「一人で好きな絵本を見て過ごしている」などが挙げられる。また、新しい活動への不安が高い事例としては「年長児が部屋内に作った迷路を見て、いつもと違うと怖がり、部屋に入ろうとしなかった」「ハロウィンパーティーで子どもたちが球面をつけた途端に『こわい』と大泣きして部屋から出て行った」などがあつた。子どもを集団遊びに誘う段階では、子どもの好きなことを取り入れて興味を持たせたり、遊びの内容や手順、ルールを事前に伝えて不安を低めたりする配慮が必要であると言える。加えて、子どもにとって遊びの難易度が高くないかを確認し、たとえば鬼ごっこは鬼が見分けやすいように帽子をかぶらせるなどの工夫が必要であろう。

集団遊びに参加したものの、遊びに集中できずに途中で外れてしまったり、ルールを守れないために他児との間でトラブルが起こったりする事例があつた。ルールを守れない背景には、ルールを理解していない、衝動性や多動性が強いためにルールを守れないという2つの要因があることがうかがえた。発達障害児が集団遊びを楽しんで続けられるように、子どもの気が散らないような環境を整え、ルールの理解を促したり、ルールを守りやすい工夫をしたりすることが必要になる。

感覚過敏が遊びへの参加の妨げとなった事例としては、「泥を触ることができず、身体についただけでパニックになる」「スピーカーから音楽が流れると耳をふさいで嫌がる」などがあつた。一方で、「泥をほんの少し触らせることから始めたところ、泥を触ることを嫌がらなくなった」ケースがあつたことから、少しずつ刺激に慣らす支援や、耳当てなどをして不快な刺激の軽減を図る支援が有効であると考えられる。

3. 集団遊びに参加している発達障害児の様子

(1) 方法

2014年7月に、T県内の幼稚園1園と保育所1園において、集団遊びに参加している発達障害児やその傾向のある子どもの様子を観察し、保育者へのヒアリングを行った。観察した場面は、クラス内での手遊び(1場面)、クラス内でのハンカチ落としゲーム(1場面)、ホールでの運動遊び(2場面)であった。観察対象児は8名であったが、ここでは4名の事例を示す。

(2) 結果と考察

対象児3名(A児、B児、C児、いずれも4歳)それぞれの特性と、手遊び歌や、ハンカチ落としゲームへの参加時の様子を表1にまとめた。表1より、A児やC児は、口頭で説明を受けるだけでは、遊びの流れやルールを理解することが困難であると推察される。B児は、保育者のルール説明を聞き逃している可能性が高い。

発達障害児に対しては、イラストや目印などを使って遊びの流れやルールを視覚的に示すなどの工夫が必要である。また、模倣が苦手な子どもと手遊びをする場合には、保育者がその子どもを抱き、子どもの目の前で手を動かしてみせるといった工夫が必要となる。こうすることで、子どもは保育者の手に集中しやすくなる。また、子どもと保育者が同じ方向を向いているので、手の動きが模倣しやすくなる。

D児(広汎性発達障害、5歳)は、ホールに組まれたアスレチックコースで保育者や他児と遊んでいたが、途中で遊びから離脱してしまう。ただし、D児は自分の調子が崩れた時に、一端、自分の教室に戻って粘土をすることで、気持ちを落ち着かせる方法を身につけていた。D児は気持ちが落ち着くと、ホールへ戻っている。これは、集団の中で調子を崩しやすい子どもが、無理なく集団遊びに参加する上で有効な方法であると言える。

表1. 手遊びやハンカチ落としに参加した対象児の様子

	A児(4歳)	B児(4歳)	C児(4歳)
特性	個別の声かけが必要。新しいことへの不安が高い。	多動性と衝動性が強い。不器用。	動きがぎこちない。遊びが続かない。
手遊び	手遊びも歌うこともせている。	手指を正しく動かして参加していた。	左手の指を右手で順にたたく動作が模倣できない。
ハンカチ落とし	参加せず、その場でボーっとしたり他児にちょっかいを出したりする。	ハンカチを持って立ち上がるがそこで固まる。保育者に促されて走り出す。	ハンカチを持って逆方向に走り出す。ハンカチを落とす役になった際にも逆方向に進もうとした。

4. 日常生活におけるつまづきが遊びに与える影響

(1) 方法

T県内の保育所に通う子どもであって、発達障害の傾向があるために加配保育者がつけられている子どもを対象とし、2014年8月の4日間(10:00~11:30)の子どもの様子を、ビデオカメラを用いて記録した。観察対象児は2名であったが、ここでは1名の事例を示す。

(2) 結果と考察

E児の1日目と4日目の様子と活動への参加状況を表2に示した。E児は、遊びの準備をしている時や次の活動までの待ち時間中に、思い通りにいかないことがあると、次の活動にスムーズに入ることができず、遊び始めるまでに時間がかかったり、遊びに参加できなかったりすることがあった。また、E児は気持ちの切り替えがむずかしく、「ダンスの次はプール」と思いこむと、「プールは水遊びの次である」と説明されても、プールそばを離れることができない(表2の4日目)。さらに、「どこに行けばいいの?」と保育者に問いかけることがあり、どこで、どのくらいの時間、何をするのがわからないと不安になりやすい特性があると考えられる。そのため、遊びだけでなく、日常生活の流れを含めて、どこで何をするかということをE児にわかるように予告する支援が、E児が集団遊びに参加しやすい状況を増やすことにつながると考えられる。

表2. E児の様子と活動への参加状況

日付	2014/8/4(1日目)					2014/8/7(4日目)			
	朝の会	年少の会	ダンス	水遊び	プール遊び	ダンス	ダンス	水遊び	プール遊び
活動内容									
活動場所	教室1	教室3	教室2	園庭	園庭	ホール	教室2	園庭	園庭
参加の有無	全参加			○	○		○		○
	一部参加	○							
	不参加		●	●		●		●	
対象児の様子	興奮								
	平常心								
	低迷								
	泣く・パニック								

注) 「年少の会」とは3歳児クラスの子どもたちだけの集まりのこと。

文献

代田盛一郎(2008) 軽度発達障害児を含む遊び活動への支援に関する考察に向けて、大阪健康福祉短期大学紀要, 7, 165-173.

加藤友花・香野毅(2012) 広汎性発達障害児の幼児期の遊びについて—母親への質問紙と聞き取りによる振り返り調査から—, 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 20, 123-133.